

運動文化研究

42

2025 Vol.42

主要目次

【巻頭言】体育同志会 70 周年を迎えて

澤 豊治

特集 1 60 年から 70 年への 10 年間

同志会・全国研究 10 年の歩み —2016 年から 2025 年のまとめ—

制野俊弘

大会の参加者数、会員数から見る同志会組織 10 年
—同志会の研究組織をどのように発展させるか—

児玉 望

出版物からみた体育同志会 10 年

丸山真司・中瀬古哲・沼倉学

学校体育研究同志会創立 70 周年記念集会

特集 2 長編実践記録（夏大会・注目の実践）

はじめてのダンス実践 —からだと「ともに」、他者と「ともに」—

中村咲野

ベースボール授業をきっかけに —ともに上手くなることを目指して〜—

木原 希

全国研究大会報告

学会・研究集会報告

「たのしい体育・スポーツ」発行状況（2024 年夏号～2025 年春号）

学校体育研究同志会研究年報

CULTURA MOTUS

The Study of Sports, Physical and Health Education

Contents 2025

Vol.42

The Opening Article

Celebrating the 70th anniversary of the Doshikai

Toyoharu Sawa

Special Theme I: The 10 years from the 60th to the 70th anniversary

10 Years of the Doshikai Research Progress: Summary from 2016 to 2025

Toshihiro Seino

10 Years of the Doshikai Organization as Seen from the Number of Each Conference Participants and Members
—How to Develop the Doshikai Research Organization—

Nozomu Kodama

10 Years of Research into the Doshikai through Publications

Shinji Maruyama, Tetsu Nakaseko, Manabu Numakura

70th Anniversary Gathering

Special Theme II: Instructional Practice Reports: Notable Practice Reports in Summer Conference

First Dance Practices : “Together” with the Body, “Together” with Others

Sano Nakamura

Baseball Practices as a Starting Point —Aiming to Improve Together—

Nozomi Kihara

体育同志会 70 周年を迎えて

澤 豊治

(全国常任委員長・滋賀支部)

1. 世界の秩序と平和

そして環境が壊されていく

私は、平和と民主主義、そして民主教育を守り発展させる立場で、今日まで各種の活動に関わってきましたが、今ほど平和と民主主義に対する不安と焦りを感じたことはありません。どこかでこんな方向に世の中が進むはずがないと信じていました。しかし、現在の世界的情勢やそれに対する我が国の対応を見ると、この不安と焦りは日ごとに増幅されるばかりです。得体の知れない不安感を覚えます。世界が大きく右傾化し先の15年戦争前夜のようになっているのではないのでしょうか。

先ずは世界情勢に目を向けてみましょう。アメリカトランプ政権の動向です。就任以来彼の民主主義を敵対視する妄言と蛮行には驚きを隠せません。就任演説では、19世紀後半の白人主導による領土拡張主義のスローガン「明白な天使」を掲げ、『メキシコ湾の名称をアメリカ湾に』、『アメリカにはグリーンランドが必要だ』、『カナダを米国51番目の州にする』、『パナマ運河を返還させる』と言いたい放題です。ガザでの紛争に関わっては、『パレスチナ人をガザから強制移住させリゾート地にする』と発言し、ロシアによるウクライナ侵略戦争では、ロシアから侵略を仕掛けられたウクライナに対し、『助けて欲しければウクラ

イナの希少鉱物資源の収益の5割をよこせ』と、脅しとも取れる圧力をかけゼレンスキー大統領を『ネオナチ』呼ばわりする始末です。世界が築き上げてきた社会の秩序やルールを全く無視。トランプ氏こそまさにアドルフ・ヒトラーの再来と言ふべきです。このような民主主義を脅かし弾圧しようとする大国主義的な動きや右傾化する動きがアメリカだけでなくロシアや中国、イスラエルをはじめとする世界各国で起こり始めていることです。

次に、喫緊の課題として地球温暖化問題があります。この問題も世界的に取り組まなければならない一刻の猶予も許されない重大問題です。そのような状況にもかかわらず多くの国が自国の利害のみに固執し、今や気候変動による自然災害は常態化するなど地球は瀕死の状態の一手手前まで来ています。

国内に目を向けてみましょう。先ずはこれらの問題に対し我が国はどのような姿勢で臨んでいるのでしょうか。残念ながらアメリカトランプ政権言いなりと言ってもよいでしょう。先に行われた石破・トランプ首脳会談では、2027年度までに47兆円超の軍拡を確認し、その後も抜本的に防衛力を強化していくことを我が国の国会で審議する前にトランプ氏に誓約しました。その上アメリカのバリ協定離脱、パナマ運河、グリーンランドの支配権、ガザ地区からのパレスチナ人移住と米軍による占有どれ一つにも批判どころか言及もし

〔巻頭言〕 体育同志会 70 周年を迎えて（澤豊治）

ていません。「なぜ一切言及しなかったのか」と国会で問われると石破氏は、「先ずは信頼関係を構築することが重要だ」と答え、トランプ氏におもねるため言及しなかったことを認めるありません。

国会では、来年度予算案が通過しましたが、その予算案では、前年度物価上昇率（2.7%）の中、文教・科学予算（1.4%）、社会保障予算（1.5%）と、物価上昇率を下回る伸び率でしか予算を計上していないにもかかわらず、軍事費だけは、9.5%の伸び率で、額にして8.7兆円という巨額の予算を計上しています。一方で、わずか年1千億円の国費削減のため、高額療養費の負担増を患者に押しつけようとしているのです。加えて、大手企業の賃上げはされますが、多くの中小企業の賃上げはままならない状況で物価の高騰は庶民を苦しめています。このことは、必ず子ども達の生活や発達にも大きな影響を与えます。例えば一人親家庭の子どもの相対的貧困率は44.5%にもなり、1日の食事が学校の給食だけという子も増えている状況などがその例です。私たち教員の仕事は、子ども達の現在と未来に責任を持つことです。このような社会情勢に無関心であってよいわけがありません。見て見ぬふりをするのは、子ども達への最大の裏切りとも言えるのです。未来を生きる子ども達にどのような社会を残していくのかを考えるためにも、我々が現実の社会をしっかりと見つめその課題を明らかにしていくことが重要だと考えます。社会が数え切れない矛盾や課題を抱える現代に生きる子ども達のことを考えるとき、先日まで放映されていたTV番組の御上先生が生徒に伝えたことば「The personal is political」＝「個人が抱える生きづらさ、それは個人で何とかしろってなりがちだけど実は政治的な問題。つまり政治が解決すべき問題って意味だね」まさにこのことばの意味を私たち教員は深く自覚すべきではないでしょうか。

2. 今「学校」が問われている

・子ども達の叫び

文科省の最新（2024）の調査結果によると全国の不登校児童生徒数が34万人を突破しました。11年連続の増加です。特に2020年から3年間の増加率は急激です。コロナ禍を経て教育現場では十分な議論も無い中「教職員の多忙化解消のための行事精選」を隠れ蓑に学校行事が無原則に減らされる一方、GIGAスクール構想の名の下、一方的にICT教育が進められています。そんな学校の有り様に「なぜ学校で学ぶのか」の問いを子ども達が鋭く突きつけてきているのではないかと感じます。

「何のために何を学ぶのか。それをなぜ学校で学ぶのか」この問いを教師自らが自問自答しなければ、やがて学校は子ども達にとって何の魅力も意味も無いところになってしまい、教師のアイデンティティーも喪失してしまうのではないかという危惧を覚えます。

・教師という仕事

なぜ私たちはこの職業を選んだのでしょうか？ひとそれぞれであるとは言え、子どもが憎くて嫌いでこの仕事に就いた人はまずいないはずです。教師の誰もが「子ども達に幸せになって欲しい、力強く生きていって欲しい」と願いそんな子ども達の人格形成の役に立つ仕事だからこそ誇りを持ってこの仕事に就いたはずです。

しかし、現実はどうでしょう。文科省の最近の調査ではうつ病などの精神疾患で休職した教員は全国で7,000人を越えています。某県のここ3年の調査結果を見ますと小・中学校教員では、退職者数が急増しています。特に注目したいのは、2021年～23年の3年間で20歳代教員は小学校92人、中学校39人、30歳代では、小学校83人、中学校29人が退職していることです。中でも女

〔巻頭言〕 体育同志会 70 周年を迎えて（澤豊治）

性教員の退職が男性の3倍も多くなっています。また、新規採用教員の年度途中・年度末退職者の数は、2022年8名、2023年12名になっています。この数字は何を意味するのでしょうか。学校が子ども達の居場所でなくなりつつあると同時に教員にとっても夢と誇りを持たない教育現場になっているということではないでしょうか。

今、学校は子ども達にとっては仲間とともに学ぶ意味や楽しさが感じられず、早期に自分に見切りをつけ分相応に生きていくことを教えられる場所であり、教師にとっては教育する自由が奪われ学習指導要領に指導方法まで縛られた教育を淡々と業務としてこなしていく場になっているということです。このことは、この間、教育行政が推し進めた施策が誤りであったことを子ども達や教職員の実体を示すデータが物語っていると言えます。

・若い教師の苦悩

先日、若手教員が40数名集まる自主学習会に参加してきました。その中で語られたいくつかの事実衝撃を受けました。教職8年目の中学校の男性教員のレポートです。

新1年生の担任として課題のあるA君を担当することになり、小学校との引き継ぎ会議に出ると、A君の小学校での担任から「ボクが担任したら、まあ大人しくやりました」と得意げに語られ、暗に中学校でも力で抑えろよと言われていると感じた。新学期が始まってA君の問題行動が頻発する中で周りの職員から「もっと担任がビシバシ抑えて欲しい」と的な意見を言われた。一番キツかったのは、学級の子どもから「先生があいつをちゃんとさせなアカンねんで!」と言われたときであった。そんな環境の中で次第に考えが変わり、年度当初の自分は、「力の指導はしない」「子どもと語り、子どもの気持ちに寄り添った先生になる」という思いは消えて

いき、いつの間にか力の指導をしなければいけないと真剣に考えるようになり、スポーツジムに通い筋力トレーニングをするようになりました。

もう一人、講師経験を2年の後、新規採用された中学校女性教員。講師経験をかわれてなのか2年生の担任を任されたそうです。

私の学級で課題の多い男子生徒J君が起こすトラブルについて学年主任をはじめ他の学年教員に個別に相談するが、誰も本気で相談に乗ってくれません。1年から持ち上がりの同僚からは、「うちの学年は個人プレーが多いから気をつけないとおていかれるよ」とアドバイスを受けました。30歳代の学年主任が提案したのは「そんなに困っているのなら彼が学校に来ないように仕向けていこう」でした。私は絶望的な気持ちになり、余り頼りたくはなかったのですが、全校のボス的立場にある主幹兼生徒指導の男性教員に相談しました。彼は、学年教師団に「学年で起こっていることだから学年で責任を持ってビシッと指導しろ」と指示し、やっとJ君のことで学年部会を開いてもらいました。しかし、会議はまったく納得のいかない話し合いで終始し、方針すら出ないまま会議は終わりました。結局そんな会議もこの一回だけで1年が終わりました。

・創造性豊かな授業づくりにこそ課題に挑む糸口が…

学校はある意味瀕死の状態だと言えます。このような状況においても私たちが最も大切にしなければならないのが教科指導（授業）のはずです。最近の全国常任委員会場で話題になっているのが体育専門誌「体育科教育」2019年3月号に掲載された音楽クリエイターヒャダイン氏のエッセ

〔巻頭言〕 体育同志会 70 周年を迎えて（澤豊治）

イです。氏はエッセイの中で「なぜあなたたち体育教師は僕たちにクラスメイトの前で恥をかかせようとするのでしょうか？」とかなり強く挑発的なトーンで問いかけています。私は「なるほど、その通り。全国の体育教師はこの思いを知らなければならぬ」と思いながらこの文章を読みました。興味を持って氏の経歴を見てみると京都大学出身だと分かりました。では氏は数学や理科のできない子どもの気持ちは、分かるのでしょうか？その子達が数学や理科は恥をかかせる教科だから無くせよと言えばそりゃそうだと納得するのでしょうか。私がここで言いたいのは、ヒヤダイン氏を批判することではなく、どの教科であれ「本当に学ぶということは、本当に賢くなるということは、誰にとってもとても楽しくて有意義なことなんだよ」と言える授業を創ることこそ大切なのではないかということです。私たち教師の使命は、子ども達に仲間とともに学ぶことの意義や喜びをしっかりと伝えることなのです。それを私たちの仕事の本流とし、その子ども達の学びを阻害する要因を取り除くことが教育行政や保護者そして私たちのもう一つの仕事のはずなのです。

3. 体育同志会の新たな旅立ち

ここまで見てきたとき、同志会の課題と今後の方向が見えてきたと思います。一つは、子ども達に豊かで本当の体育科としての学び、それは人々が生み育んできたスポーツ文化の技術を体得しその歴史を学び取り、未来に発展させるための課題や矛盾を見つけその解決に挑む力を育むこと。先ずは、子ども達にスポーツをすること、上手になることとそのための方法があることを学ばせる。その過程に潜む葛藤や矛盾に仲間とともに挑む。そんな授業をつくり出していくこと。

もう一つは、そんな教師になるための同僚性を全国的に組織していくこと。同僚性とは何も同じ職場のものだけのことでありません。もちろん

子ども達のための学校づくりは職場の同僚と力を合わせなければなりません。しかし、体育の授業づくりは、支部、ブロック、全国の仲間とともにつくっていくのです。場所は離れていても子ども達に対する願いや思いが一緒なら立派な同僚です。この同僚性を力強いものにするためには、同志会員一人ひとりも主体的でなければなりません。誰かがやってくれる、誰かが教えてくれる、ではなく自分たちでつくっていくのです。

本年は体育同志会創立 70 周年の年です。これを機に同志会では新たな研究に挑もうとしています。一つが「運動文化論研究」、もう一つが「教育課程研究」です。この研究活動を会の運動としてどう結びつけていくかも併せて追求しなければならないと思っています。同志会 30 周年記念誌「運動文化の創造」のエピローグにこのようなくだりがあります。今日の同志会においても重要と考え引用します

―明日に向かって―

この 30 有余年の歲月、私たちは三つのことにこだわり続けてきた。

一つは、子どもを大切にすること。子どもは、私たちが思うよりずっと早くから人格をもち、私たちがいなくなってもまだこの世界を支えていく。その子ども達を、どうして「現在」の枠にしばりつけておくことができよう。

二つは、仲間を信頼すること。体育は、長い間虐げられ、社会の片隅に追いやられてきた。運動文化のよろこびと、それを手段化する軍事、経済、政治とのはざまで、世界の仲間が悩み続けてきた。しかし、スポーツと体育は人々を結びつけこそすれ、平和を引き裂くことはなかった。そのつながりを、私たちは信じ続けてきたのである。

三つは、いつも創造を目指してきたことである。どのような批判でも科学の問題として提示される限り、私たちは、進歩のための助言だと思って積極的に受け止めてきた。歴史は後戻りしない。批

〔巻頭言〕 体育同志会 70 周年を迎えて（澤豊治）

判こそ進歩の源泉であり、創造のエネルギーである。

生きた組織には現状維持ということがない。体育同志会も又、30 有余年の実践と研究の蓄積を土台にして、21 世紀へと前進していく。そこにはきびしい試練が待ち受けているであろう。私たちは、「きびしくない時代はない」という合い言葉を唱えながらここまですすんできた。21 世紀

に向けて体育同志会を支え、日本の民主教育運動を支えていく世代は、この合い言葉を時代を切り拓く者の誇りとして唱え続けていくであろう。（後略）

この合い言葉を今一度全国すべての同志会員に贈りたいと思います。

目 次

巻頭言：体育同志会70周年を迎えて（澤 豊治）	3
-------------------------------	---

特集1 60年から70年への10年間

同志会・全国研究10年の歩み ―2016年から2025年のまとめ―（制野俊弘）	9
大会の参加者数、会員数から見る同志会組織10年（児玉 望）	21
―同志会の研究組織をどのように発展させるか―	
出版物からみた体育同志会10年（丸山真司・中瀬古 哲・沼倉 学）	29
学校体育研究同志会創立70周年記念集会 ―20代の実践を振り返り、30代の私を展望する―	39

特集2 長編実践記録(夏大会・注目の実践)

はじめてのダンス実践 ―からだと「ともに」、他者と「ともに」―（中村咲野）	58
ベースボール授業をきっかけに ―ともに上手くなることを目指して―（木原 希）	65
第168回学校体育研究同志会全国研究大会・「みやぎ・松島大会」分科会のまとめ（矢部英寿）	72
「同志会・秋の学校」（和光小学校公開研）報告（制野俊弘）	90
2024年冬大会報告（黒川哲也）	92

学会・研究集会報告

日本体育・スポーツ・健康学会／日本教科教育学会／日本スポーツ教育学会／教育のつどい(教研集会)	97
「たのしい体育・スポーツ」発行状況(2024年夏号～2025年春号)（たのしい体育・スポーツ編集委員会）	98
2023年度(2023/08～2024/07) 学校体育研究同志会決算（全国事務局）	101
編集後記／奥付	102